

伝後京極良経筆小巻物切「源氏集」の性格

池 尾 和 也

はじめに

『源氏物語』の様々な享受の一端を示すものとして、物語から和歌のみを取り出した「源氏物語歌集」（以下、「源氏集」と呼称）がある。その形態や内容は多様であり、物語の和歌をすべて抜き出したものゝほかに、抄出したものや巻名の元となった和歌のみを挙げるものもある。また、和歌のみを記すものから、詠作場面を詞書として付し、作者名を記すものもあり、この場合も物語本文をほぼそのまま抜き出すものとその要約を記すものなど、多岐に亘っている。⁽¹⁾ 稿者の手元にも幾種類かの源氏集切が存するが、こゝでは比較的よく知られている伝後京極良経筆小巻物切の新出断簡二葉について紹介し、検討を試みたい（図版はすべて原寸大）。

1、伝後京極良経（藤原為氏）筆小巻物切（末摘花）

図版①は未装の断簡で、極札（楮紙、一三・四×二・一cm）には、

二條家為氏卿ゆふきりの〔守村（墨印）〕

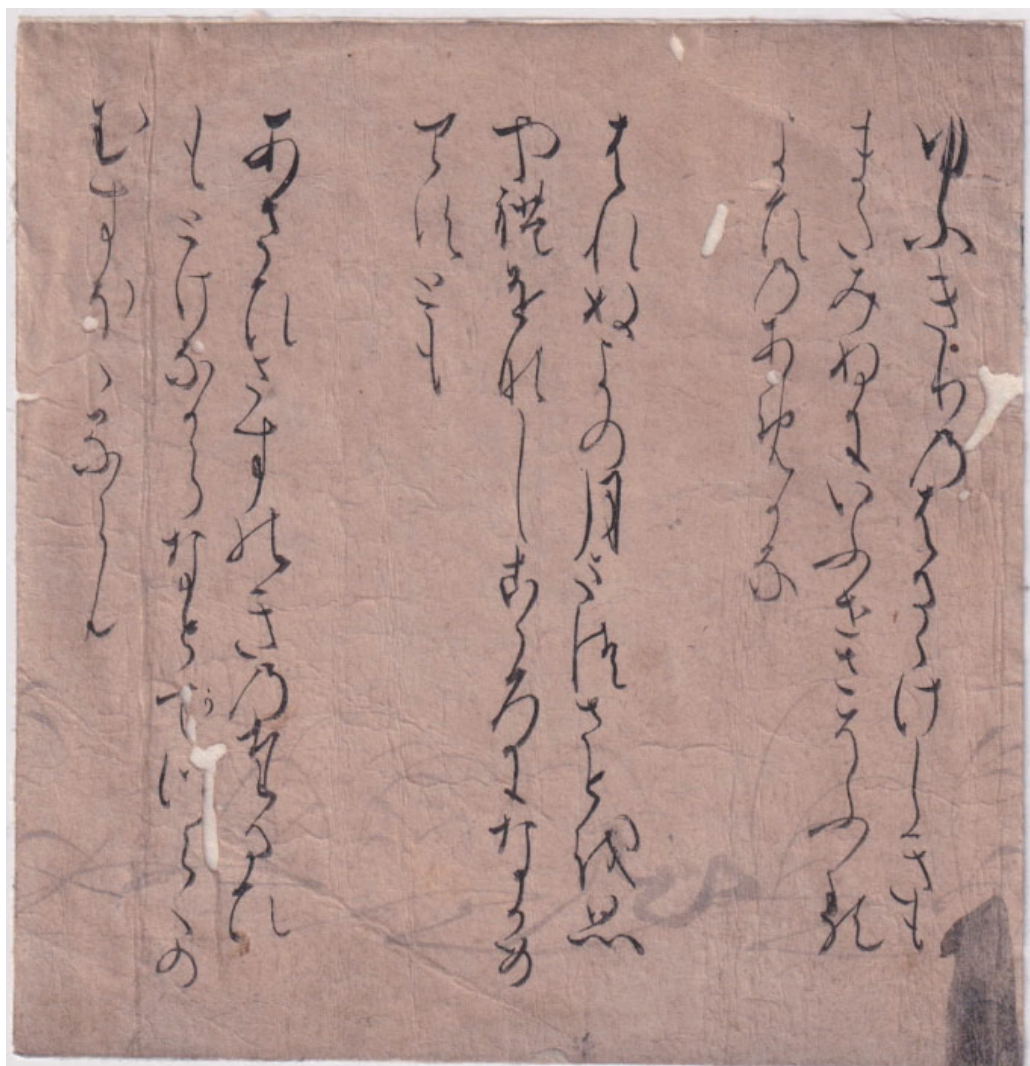
とある。裏書などはないが、その個性的な筆跡から、古筆分家三代了仲の極めと知られる（了仲は明暦二1656～元文元1736年八月晦日、八十一歳。延宝二1674年二月六日に没した了任の後を継いだので、江戸中期頃の極めとなる）。極印右下に鉛筆書きで「源氏／末摘花」との書入があり、筆跡や入手ルートから久曾神昇氏による所為と推測される。

本紙の料紙は上質の楮紙。緑青で下草、銀泥（薄墨）で葦手文字や岩模様の下絵を描く。一〇・〇×九・七cm（字高八・五cm）で、顕著な巻皺が認められ、元は極小型の卷子本であったと推測される。

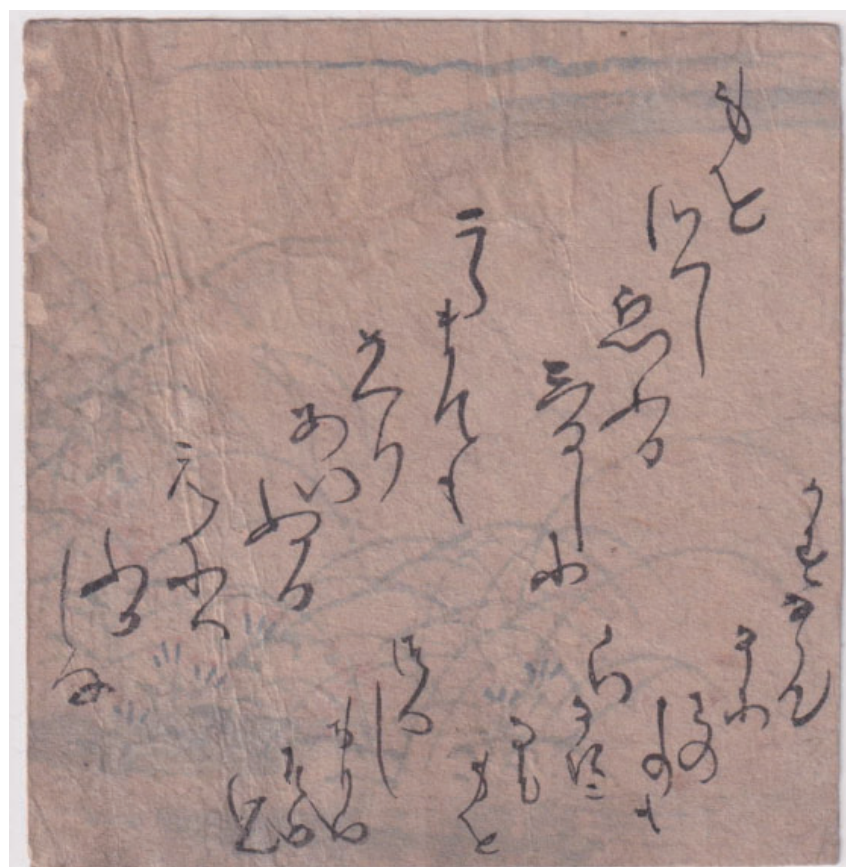
ツレは『古筆学大成』第二十三卷（以下、「古筆学大成」と略記）所収の「伝後京極良経筆源氏物語和歌（一）」「二葉のほか数葉が知られるが、詳しくはあとで纏めて扱いたい。本切極札は藤原為氏を伝称筆者とするが、書写年代は、『古筆学大成』解説に「料紙の装飾技法・書風からして、十三世紀初頭の書写本」とするように、装飾中の葦手文字の使用や句の途中で改行する和歌の書式、まだ様式化する以前の後京極流の書風からは、良経の生存期間に重なる鎌倉初期頃と推定される。各種名葉集類の「良経」「為氏」条に該当する記述は見いだせない。

本紙を翻刻しておく。

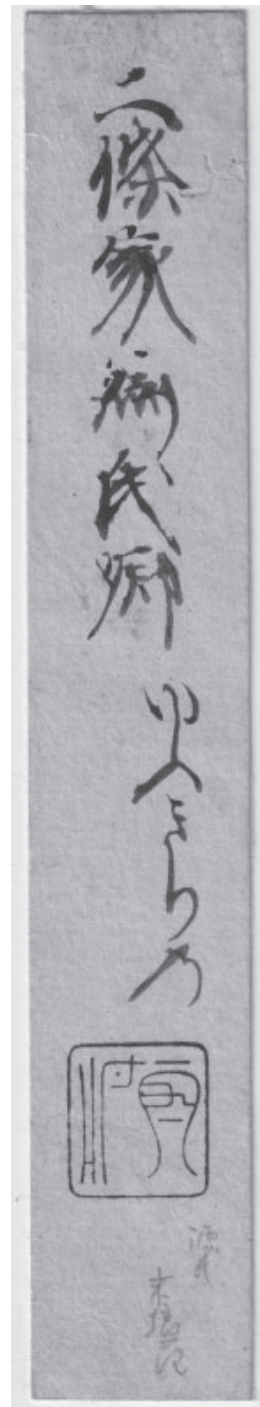
図版① 伝後京極良経筆小巻物切源氏集（末摘花）



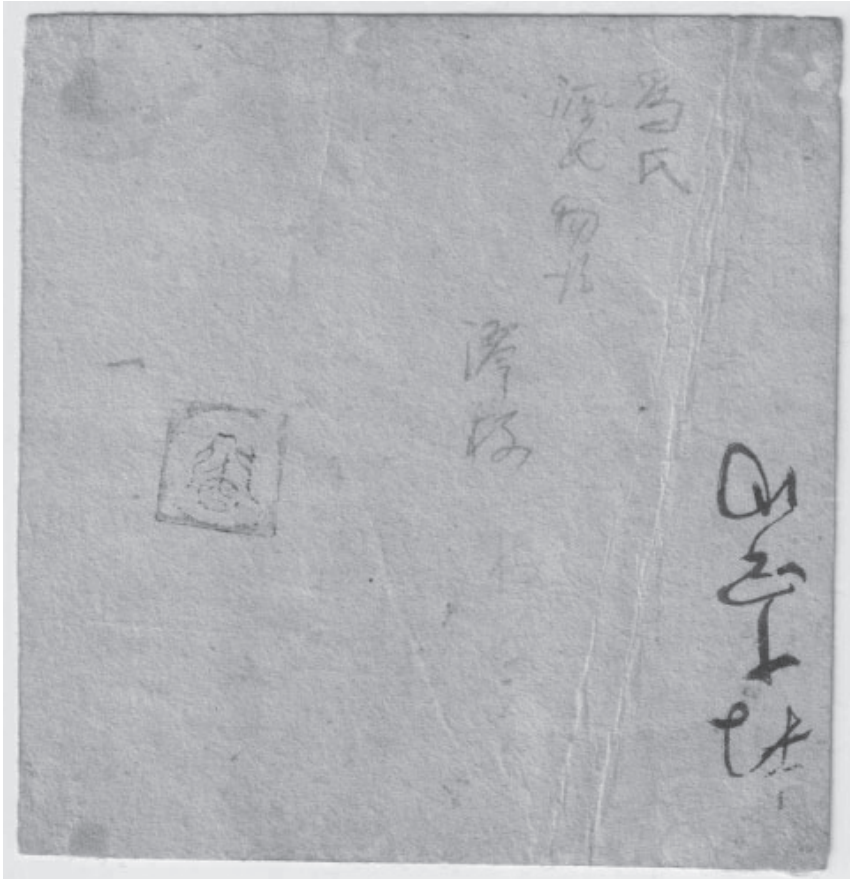
図版② 伝後京極良経筆小巻物切源氏集（濡標）



図版① 極札



図版② 裏面



ゆふきりのはるゝけしきも
またみぬにいふせさそふる
よひのあめかな

はれぬよの月まつさを思
やれをなしこゝろになかめ
せすとも

あさひさすのきのたるひ
もとけなからなとてつらゝの
むすほゝるらん

となる。和歌三行書の場合、紙幅に余裕が出易いので、一首目のように五七・五七・七と書けそうであるが、二・三
首目は句が行を跨いでおり、句単位で書写する意識に乏しいことが見て取れる。さほど中心線を整えて書写しようと
いう意識も感じられず、こうした点からも鎌倉初期頃までの書写であることを窺わせる。八行目「などて」の「て
(天)」は虫損箇所なので見にくいが、「か(可)」と傍書されており、ミセケチはないようなので、異本注記として扱っ
ておいてよいであろう。このような美麗な料紙にのちの所有者が校訂を施すことは考えにくいので、おそらく親本に
あったものをそのまゝ書き写したものと思われる（墨色や筆致からも、本文と同筆と判断される）。

書写内容は、『源氏物語』の「末摘花」の巻から和歌を抜き書きしたもので（新編国歌大観⁽³⁾番号七五〇七七、源氏物語大成⁽⁴⁾二一六頁1行・同6行・二二二頁3行、源氏物語別本集成⁽⁵⁾文節番号061775～80、061813～22、062532～39）、和歌は所載順に記されており、おそらくは所載された和歌をすべて収録したものと推測される。こうしたものは、源氏集・源氏和歌集・源氏物語和歌など、呼称されるが、物語に直接取材した歌集的なものが先にあったのか、梗概書のような物語の抄出を元に和歌を中心とした歌集が作られたのかは検討の余地があるようである。⁽⁶⁾たゞし、本切のような純粹に和歌のみを取材する形式のものは、おそらく直接物語そのものから紡ぎ出されたものと考えてよいように思われる。このような和歌本文のみで形成される源氏集がいつ頃から行われていたのかは不明であるが、『林下集』三六三詞書に「源氏集を皇太后大夫俊成卿にかりて」と見える「源氏集」や『明月記』承元元年1207年五月二日・四日に見える「源氏集一帖」「源氏集下帖」などはおそらくは冊子本であり、⁽⁷⁾本切から推測される卷子本形態のものとは別種で、詞書・作者名などをともなったものであったと推定される。これに関連して、「梗概本」と分類される一群の古筆切が知られるが、『古筆学大成』所収の図⁽⁸⁾332～341・343・345～346といった書写年代の古いとされるものは物語本文を和歌より下げて書く形式を採っており、これらは物語本文よりも和歌を中心として編まれたものと見做されるので、「源氏集」の範疇に入るべきものであろう。⁽⁸⁾『林下集』や『明月記』にいう「源氏集」は年代的にはこれらの古筆切の書写年代に一致しており、こうしたものを「源氏集」と呼称していた可能性が高い。

この伝後京極良経筆小巻物切は、これらの詞書をともなった一連の古筆切群を除けば、和歌のみを採った源氏集の現存最古の遺品と言えるが、それがこのような装飾料紙を用いた瀟洒な巻物であったことは、その享受対象が高貴の女性であったことを窺わせる。鎌倉中期以後、室町期には多く作成された『源氏物語』を散らし書きした手本様の大振りの卷子本と同じく、これらは調度品でもあったであろうが、縦一〇cmほどの小巻物というサイズ感は、実際に手

に取って鑑賞するための用途を有していたことも想像させる。

本切の一首目は源氏の歌で、末摘花との初めて逢瀬のあと、自邸の二条院に帰り、後朝の文を夕方になってようやく書いて届けた中に詠んだもので、末摘花のつれなさを嘆くような歌であるが、早朝に届けるべき後朝の文を夕方になるまで失念しており、源氏は和歌に添えて、「雲間待ち出でむほど、いかに心もとなう（貴女が打ち解けて下さるのを待つ間、どんなに不安であることか）」とすぐに訪れない言い訳をして、末摘花の周囲の女房たちの悲嘆を誘うが、当の末摘花は、昨夜の初めての出来事に混乱してそれどころではない。女房たちに急かされて末摘花がようやく書いた返事が二首目で、中々訪れてくれない源氏のつれなさを嘆いているが、源氏は結局は来訪を怠ってしまう。三首目は、八月二十余日の逢瀬以来、いつまで経っても末摘花のもとを訪れない源氏を仲介した命婦が責めるなどして、ようやく冬の夜の夜に再訪し、故常陸の宮邸の貧しい様子に気づいたりしたものゝ、翌朝雪明かりで末摘花の容貌を見て失望しつゝ詠んだ歌で、打ち解けない様子の末摘花を詰っているが、これもまた本心からのものとは思われない。

本切を底本として諸本との異同を確認するが、漢字・仮名・音便の違いや詠者の注記の有無等は原則として取らず、本切と校合本に一本でも異同のある箇所のみを対象として掲げる（冒頭の算用数字は新編国歌大観番号、丸付き数字は第何句目、横書きの算用数字は別本集成文節番号「巻別番号は省略」、底本文上の※は当該部分を異同とは見做さないことを示す。校異記号は「別本集成続」に準じたが、元本文の状態をイメージし易いように傍書の形を採り、処理し切れない情報は「↓」として当該伝本略号下に記した⁽⁹⁾）。

75④1780※こふせき (良古陽御角阿尾池国肖善日伏穂保前高天中「平大鳳横」飯三米正冷) — いふせき⁽¹⁰⁾ (七)・いふせをさ⁽¹¹⁾ (出石)

75 ④ 1781 そふる（良古陽角阿尾池国肖善日伏穂保前高天中〔七平大鳳岩横〕飯三米正）——まさる（御冷）

76 ① 1813 4 はれぬよの（良古陽御尾池善日高三）・はれぬ夜の（阿国伏穂保天飯米正）・晴ぬよの（肖前）——はれぬまの（冷）

76 ⑤ 1821 ※なかも（良古陽御角阿尾池国肖善日伏穂保高〔七平大鳳岩横〕飯三米正冷）・詠（天）——なかも（前↓
〈行間〉「つきみはとちきりていてし」）

76 ⑤ 1822 ※せずとも（良古陽御角阿尾池国肖善日伏穂保前高天中〔七平大鳳岩横〕飯米正冷）——せずとん（三）

77 ② 2535 たるひも（良角阿尾善高天中〔七平大鳳岩〕冷）——たるひは（古御池国肖日伏穂保前〔横〕飯三米正）・
つらゝも（陽）

77 ③ 2536 ※とけなから（良古陽御角阿尾池国肖善日伏穂保前高天中〔七平大鳳岩横〕飯三米正冷）——とけぬれ^{すなから}（天）

77 ④ 2537 なとて^か——なとて（良陽角阿善冷）・なとか（古御尾池国肖日伏穂保前高天中〔七平大鳳岩横〕飯三米正）

77 ⑤ 2539 むすほゝる（良古陽角阿尾池国肖善日伏穂保前高天中〔平大鳳岩横〕飯三米正冷）——むすほをる（御）・
むすほる（七）

対象は和歌本文の異同のみであるが、有意のⅡ対立する異同としては77②「たるひも」——「たるひは」、77④「なとて」——「なとか」の二箇所が上げられる。ともに定家本系統とは一致せず、前者は河内本系統の主要伝本に加えて阿里莫本・善本叢書本（伝冷泉為相本）及び別本である角屋本・陽明文庫本修正本文に一致する（阿里莫本「末摘花」は河内本¹⁰、善本叢書本は池田本・肖柏本・日大三条西家本に近い定家本系統に分類される¹¹）。後者の本文「なとて」は陽明家本・角屋本・冷泉家本源氏和歌集に加えて、やはり阿里莫本・善本叢書本に一致する（異本注記本文はその他

の諸本に一致)。これらを総合すると、本切の本文は陽明文庫本・角屋本・阿里莫本・善本叢書本にほぼ一致するが、阿里莫本・善本叢書本は各々河内本・定家本諸本からはみ出した本文を有していることになる。陽明文庫本・角屋本との一致からは、本切の元となった本文も別本系統であったことが推定されるが、抑も本切の推定書写年代は定家本や河内本の成立に先行するものと考えられるので、それらの系統の本文との一致や不一致を系統判別という視点で見るとは、あまり意味のあることとは思われない。たゞし、陽明文庫本や角屋本といった古本系別本との一致は重要であり、このような瀟洒な調度品を作成するにふさわしい文化的・経済的に豊かな貴人層に、そのような本文を持つ『源氏物語』が流通していたことが確かめられる遺品といえよう。

なお、本切の異同とは直接に結びつかないが、冷泉家時雨亭文庫蔵『源氏和歌集』が有する異同(75④「まさる」・76①「はれぬまの」)は興味深い。後者は単純な誤写(「よ(与)」―「ま(万)」)の可能性が高いが、前者は古本系別本である御物本とのみ一致する。これは『物語二百番歌合』作成時に「御物本の類の『源氏物語』から作成された源氏物語歌集を定家は利用した⁽¹³⁾」とする推測に一定の裏付けを与える例ではあるが、同詠は歌合には撰歌されていない。同じく古本系別本を撰歌源としながらも、本切とは別系統の「源氏集」が編まれていたことの左証とはなろう。

本切は、伝花山院師賢筆松尾切や伝二条為重筆源氏物語和歌切などのように和歌の詠作状況を示す詞書的な文言をともなわず、和歌本文のみを記している。享受という観点から見れば、本切のような形の方が享受者が歌集の元となった『源氏物語』により一層通暁していることを前提とするものと捉えることができる。そうした意味では平安末期頃には始まっていた注釈的享受の世界とはまったく別の、物語そのものゝ記憶・理解に基づく享受の一樣相を示しているものと言えよう。この瀟洒な小巻物という形態も、そのような享受者層の求めに応じた、それにふさわしい形であったのだと想像される。物語の世界に憧れるまだ年若い姫君が、これを手している姿が目に見えようである⁽¹⁴⁾。

2、伝後京極良経（藤原為氏）筆小巻物切（滲標）

図版②は未装の断簡で、極札は付属せず、切裏に右下に「数十四内」と本紙の上下とは逆向きに墨書があり、左中央に「飛田」の陽刻墨印、右上に「爲氏／源氏物語／滲標」と鉛筆書入がある（入手経路から図版①と同じく久曾昇氏の書入と推定される）。「数十四内」は、十四枚の内一枚の謂であり、「数〴内」は同種の断簡の枚数を示すことが多いので、鑑定者Ⅱ売買者の手元には十四枚の小巻物切が存していた可能性がある。

本紙の料紙は上質の楮紙で、上部には薄藍で雲や山並み、中央から下部にかけては同じく薄藍で水辺や生い茂る草花の下絵が描かれている。八・〇×七・八cm（字高七・五cm）と極めて小さく（ツレを勘案すると、上下を1cmずつほど切り詰められていることになる）、和歌一首を三組に分けて（三行書に準じて）、十二行ほどに散らし書きする。巻皺が認められ、元は極小型の卷子本と推測される（ツレの状況によつては、小色紙であった可能性もある）。書写年代は、その下絵の様式や筆致から、やはり鎌倉初期頃と推定される。図版①とそのツレには、和歌を散らし書きしたものとは確認されていないが、その筆跡や下絵の特徴、書写内容を考え合わせると、本切もそのツレと認定してよいものと思われる。たゞし、本切のみが下絵の顔料として薄藍を用いている点は顧慮すべきであり、無理にツレと認定することは差し控えるべきかも知れないが、古筆学大成図³⁷²は本切と同じ草花を描いており、元図版が雑誌掲載のモノクロ写真で、切自体も所在不明のため、正確な顔料の確認はできないものの、他の図版の葦草模様とは明らかに違う色合いを感じさせるもの（銀泥や薄墨ではなく、丁子や緑青とされるものよりは淡い色調）であり、本切と同様に薄藍が用いられている可能性も否定できない（これについては、同じ「滲標」を書写内容とする切などの発見を俟って、

改めて考えたい)。無論、別種の同じく極小型の散らし書きによる卷子本の断簡と考えることも可能であるが、同時代に同一内容の別形態Ⅱ和歌三行書の小巻物が存在し、かつ江戸期に少なくとも十四枚のツレの存在が想定されるにもかゝらず、散らし書き型のツレの存在が確認されないこと、架蔵二葉の入手経路が同一であること等を踏まえて、本稿では一応、同一本の断簡Ⅱツレとして論述しておくが、今後、別種の断簡と認定できる資料（同一箇所断簡など）が確認されれば、ツレという認定を撤回するにまったく吝かではないし、そのような事態Ⅱ結論になっても、本切自体の資料的意義を減ずるものではないと考える（伝称筆者名としては、その筆跡からは「後京極良経」がふさわしいが、別種のものとするれば「伝藤原為氏筆」とすべきであり、形態も「小色紙」となる可能性もあろう）。本紙を散らし書きのまゝ翻刻すると、

かすならて

身を

なに

つくし

わの

戀ふる

事も

しるし

かい

に

なきに

なに

こゝ

身を

までも

つく

めくり

し

あい

おもい

ぬる

そめ

えには

けん

ふか

しな

となるが、わかりにくいので二首を分けて散らし書きの各グループを一行書きし、改行箇所には「／」を付して示しておく、

身を／つくし／戀ふる／しるし／に

こゝ／までも／めくり／あい／ぬる

えには／ふか／しな

かすならて／なに／わの／事も

かいなきに／なに／身を

つく／し／おもい／そめ／けん

となる（形は異なるものゝ、これも和歌三行書と見ることができる）。翻刻文中の「い」は、図版①の「ひ（比）」やツレと比較しても明らかに別字であり、「い（以）」と読むべき字形と判断したが、散らし書きの際の癖字（「て（天）」「く（久）」なども相当な癖字である）と見て、すべてを「ひ」と読むことも可能であろう（校異時には、他の仮名遣いの違いと同様に異同対象とはしなかった）。

書写内容は、『源氏物語』「漣標」で（大観二六〇～二六一、大成五〇二・五〇三・二、別本集成112431～39・112457～64）、明石の君が住吉に詣でようとして社近くまで舟で通りかゝると、折しも浜辺には源氏の君が参詣に来ており、その威儀に気圧されて難波に舟を返してしまふ。これに気づいた惟光の知らせによって源氏の君が詠んだのが第一首で、源氏はこの偶然の邂逅に明石の君を思う自分の気持ちと二人の縁の深さを強調するが、明石の君の返歌は、源氏との子（明石の姫君）を出産したばかりなのに、その身分の違いを痛感することになったどうしようもない哀しみを詠んでいる。

本切を底本として、図版①と同様の方針で異同を記しておく。

- 260 ④ 2436 めくりあひぬる（良）——めくりあひける（古陽麦阿東尾池国御肖静鶴日伏穂保前高天〔七大兼岩明〕飯三米正）・めくりあひぬる^{§ける}（横）
- 261 ① 2457 かすならて（良古陽麦阿東尾池国御静鶴日伏穂保前高〔七大兼岩横〕飯正）・数ならて（肖三米）——かすならぬ（天）・かすならぬ^て（明）
- 261 ④ 2461 なに（良陽）——なと（麦阿東尾古陽麦阿東尾池国御肖静鶴日伏穂保前高天〔七大兼岩横明〕飯三米正）

本切の本文で有意のⅡ対立する異同を有するのは260④「めくりあひぬる」―「めくりあひける」と261④「なに」―「なと」の二箇所である。「ける」は偶然の邂逅への驚きの心情を表す詠歎として機能するのに対して、「ぬる」は意図せぬ邂逅そのものを偶然的Ⅱ運命的なものとして受け止めるニュアンスが強く、あとの「江Ⅱ縁」の深さへとつながりに繋がって行くが、「までも」「には」「な」といった強調語法との調和という点では、「ける」とある方がわかりやすい。「なに」「など」はどちらも「なにゆえ・どうして」であろうが、「なに」は上句の「なにはのこと」と響き合い、「など」は「身をつくし」て思うという後段の思いの強さを強調する（「どうしてこんなに全身全霊で」といった）表現ではあろう。前者は横山本の訂正前本文が一致するのみで、後者も陽明文庫本が一致する本文を持つのみという、極めて僅少な異同を有していることになる。先述のように、書写年代の観点からは定家本・河内本系統との比較は意味をなさないが、それでも陽明文庫本のような古本系別本と一致する本文を共有することは、そうした本文を有する『源氏物語』が堂上貴顕のあいだに流通していたことの証しとはなろう。

なお、本切がほかのツレと違って散らし書きという形態をとる理由としては、本切収載歌が巻名の由来となった和歌であることが理由として考えられるが、ほかに同様の散らし書きとするツレを見いだした上で判断することゝしたい（一応巻皺は認められるものゝ、巻名の由来となった和歌のみを抜き書きし、屏風等に貼るための小色紙であった可能性も現段階では否定できず、その場合はまったく別種の「源氏集」の断簡ということになる）。

3、伝後京極良経筆小巻物切のツレの検討

架蔵の二葉を除き、現在知られている伝後京極良経筆小巻物切源氏集について検討したい。ツレは五葉知られるが、⁽¹⁵⁾

これについて通覧しておく（巻別番号の早い順に掲げる）。

- (1) 浄照坊藏古筆切集⁽¹⁶⁾一〇〇「伝六条有家卿筆源氏物語歌拔書抄」・明石「大観二二五～二二七、大成四五九・同 11・四六〇」・別本集成 132480～86・2510～18・2564～73（鑑定者不明、斐紙薄墨水辺草花下絵、九・六×九・一cm、三首九行、室町時代）
- (2) 冷泉家時雨亭文庫藏「源氏集」・玉鬘「巻名・大観三三八～三四二、大成七二一・三～四・七二六・同 14・七二八・七、別本集成 220249～64・0937～45・0971～79・1152～59」（無鑑定、楮紙打紙銀泥水辺下絵、一〇・一×一七・八cm、巻頭「第十七／たまかくら」以下五首十七行、鎌倉初期）
- (3) 山口県西円寺藏古筆手鑑所収「冷泉為相」・藤袴「大観四〇三、大成九二九・三、別本集成 301426～33」（二代畠山牛庵極札、寸法不記載、丁子染水辺葦叢・文字石様下絵、一首三行、十三世紀初頭）↓古筆学大成図³⁷¹
- (4) 田中登氏藏「後京極良経小巻物切（源氏集）」・真木柱「大観四一七～四二二、大成九六〇・五・同 9・九六二・同 5・九六四」・別本集成 313177～83・3204～10・3369～77・3405～12・3615～21（鑑定者不記載、緑青水辺葦景下絵、九・九×一五・一cm、五首一五行、鎌倉初～中期）
- (5) 『布留鏡』第三巻第四号所収「後京極良経」・梅枝「大観四三三～四三五、大成九八一・四・同 6・同 9、別本集成 320764～71・0776～82・0805～12」（鑑定者・寸法不記載、丁子染水辺葦叢・文字石様下絵、三首九行、十三世紀初頭）↓古筆学大成図³⁷²

架蔵切も含めると、伝称筆者が「六条有家」「冷泉為相」「後京極良経」「二条為氏」と四様に分かれるが、各種名葉

集類の「有家」「為相」条にも当該切の記述は確認されない。極札の情報を有するのは、架蔵「末摘花」切と(3)西円寺手鑑所収「藤袴」切のみであり、鑑定者による違いを明確化するにはデータ不足である。推定書写年代は、(1)が「室町時代」とするほかは「十三世紀初頭」Ⅱ「鎌倉初期」と見ており、その料紙や装飾技法（殊に葦手文字の使用）、書風、和歌の書式などからも、妥当な見解と思われる。

この伝良経筆小巻物切が冷泉家に伝存することは極めて重要であり、当該切を冷泉家が購入するなどといったことは考えにくく、ほかの切が冷泉家から流出したと考える方が自然であろう。冷泉家のものには当然ながら極札などは付随しないが、架蔵の分家三代了仲と(3)の二代牛庵（寛永一1625～元禄六1693年四月二十七日、六十九歳）の極札の存在から、江戸前期の終わり頃には分割が始まっていたことが知られる（架蔵「滯標」切の裏書からは、ある程度纏まった枚数がいちどきに分割されていたことが窺われる）。また、ツレの縦寸の最大は(2)冷泉家切の一〇・一cmで、冷泉家側にこれを切り詰める理由も見いだせないで、これが原寸と考えてよいであろう。

収録歌の状態を見てわかるように、この伝後京極良経筆小巻物切源氏集は、元とした『源氏物語』のすべての和歌を掲載順に抜き書きしたものと推定されるので、異本歌や欠脱歌がなければ七九五首が収録されていたことになる。寸法の分かっているものゝ一首平均は幅約三・〇八cmで、和歌だけに要する分量は、三・〇八×七九五Ⅱ二四四八・六cm。時雨亭文庫蔵の寸法一七・八cmから五首分一五・四cmを引いた二・四cmが題目（巻名）Ⅱ二行分に充てられるとすれば、五十四帖巻名＋作品名（これも余白等を見て二行分と換算する）で二・四×五五Ⅱ一三二cmとなり、全体としては約二五・八mという長大なものとなる。小巻物という形状を勘案すると、ひと巻をそれほど長大なものにするとは考えにくく、かなりの数に分割する必要があったに違いない（仮に一巻三・二m〔実際にはその半分程度か〕とすると、大体八巻程になり、このあたりが現実的に可能な最小限の数字と思われる）。各巻に美麗な表紙を付して、

箱や櫃に納められていたのであろう。

次に各断簡を底本として、諸本との異同状況を一覽し、箇々に検討してみたい（通覽の便宜を図るため、先に翻刻文を付した。和歌はすべて三行書で、改行箇所「／」を付して示した↓原文は一首毎に一行分弱の空白がある）。

(1) 〈翻刻本文〉

225 なかむらんをなくもゐを／なかむるはおもひもをなし／おもふなるらん

226 いふせくもころにものを／なやむかなやよいかにとふ／人もなみ

227 おもふらんころのほとや／よいかにまたみぬ人のき／きかなやまむ

〈異同一覽〉

225 ③ 2483 なかむるは（良古陽尾池御肖日伏穂保高〔平大岩横〕飯三正）―なかむれは（麦阿天〔七大彦〕米）・な

かむれは（国）・詠るも（前↓傍\$は）

225 ⑤ 2486 おもふなるらん（良）―思なるらん（肖飯）・思ひなるらむ（古〔横〕正）・思ひなるらん（伏）・思ひ成

らん（保）・おもひなるらん（麦阿陽池国日三）・思ひなるらん（前）・思なるへし（天米）・思ひなるへし
（高尾御〔七平大彦岩〕）

226 ③ 2513 なやむかな（良古麦阿尾陽池国日伏穂保前高〔七平大彦岩横〕飯三米正）・なやむ哉（肖）・なやんかな

（御）―なかむかな（天）

226 ④ 2514 やよや（良古尾陽池御国肖日伏穂保高天〔七平大彦岩横〕飯三米正）―やよひ（麦）・やとや（阿）・や

は(前)

- 226 ⑤ 2516 ⁽¹⁾ふ (良古陽池伏「七平大彦岩横」飯三)・とふ (麦阿尾御国肖日保前高天米正)——いふ (穂)
226 ⑤ 2518 なみ (良古麦阿尾陽池御国肖日穂保前高天「七平大彦岩横」飯三米正)——なさ (伏)
227 ② 2565 ※いゝろの (良尾池日伏高「横」飯三米)・心の (麦阿陽御国肖穂保前天正)——こゝろ⁺ (古)
227 ② 2566 ほとや (良古麦阿尾陽池国日伏保前高天「七平大彦岩横」飯三米正)・程や (肖)——うちよ (穂)
227 ⑤ 2572 ～3 ききかなやまむ (良)・きゝかなやまむ (古尾国日保高「七平大彦岩横」三米正)・きゝかなやまん (麦阿御穂前天飯)——きゝやなやまん (池)・きゝ^やかなやまん (肖) きゝかなやさむ^{||} (伏)

(1)は「明石」を書写内容とするが、同巻は古筆切資料を除き別本と分類される伝本を持たない巻とされる。⁽¹⁹⁾異同を
通覧してみても、この浄照坊蔵切の系統を判別するような材料に乏しく、一応独自異文となる²²⁵⑤「おもふなるらん」
も、「思なるらん」(肖柏本・飯島本)のような表記が先にあつて、これを「おもふ」とひらいた結果生じた異文と理
解される。²²⁵③「なかむるは」——「なかむれは」、²²⁷「きゝか」——「きゝや」の異同も、大勢を占める側に属しており、
当該切の範囲では特徴的な本文を持たないと言つてよい。

(2)〈翻刻本文(□は虫損箇所)〉

- 338 □な人もたれをとふとか／おほしまのうらかなしけに／こゑのきこゆる
339 こしかたもゆくゑもしらぬ／おきにいてゝあはれいつこと／君をこふらん
340 君にもしこゝろたかはゝ／□つらなるかゝみのかみも／□けてちかはん

341 としをへていのるこゝろの／たかひなはかゝみの神をつら／しとやみん
342 うきしまをこきはなれて／もゆくかたやいつくとまりと／しらすもある哉

〈異同一覧〉

338 ① 0249 ※□な人も（良）―ふな人も（古陽国尾池御肖日伏高〔七平鳳大洋野〕飯米正風）・舟人も（保麦前天

三）・船人も（阿穂）・ナシ（平↓338落丁〈以下省略〉）

338 ③ 0252 おほしまの（良古保国麦阿尾池御肖日伏穂前高天〔七平鳳大洋野〕飯三米正風）―おほしまを（陽

338 ④ 0253 うらかなしけに（良古国麦阿尾池日伏穂前高天〔七平鳳大洋野〕飯三米正風）・浦かなしけに（御）―う

らかなしけに（保）・うらかなしけに（肖）

339 ① 0256 ※こしかたも（良古陽国保麦阿尾池御肖日伏前高〔七平鳳大洋野〕飯三米正）・こし方も（穂）―こしか

たの（天）・ナシ（平↓339落丁〈以下省略〉）

339 ③ 0259 おきに（良古保麦阿尾池御肖日高天〔七平鳳大洋野〕飯三米正）・をきに（陽伏穂）―浦に（国）・奥に

（前）

339 ④ 0262 こゝいと（良陽国保）―いつく（古肖日前三米正）・いつくと（麦阿尾御穂高天〔七平鳳大洋野〕飯・

いゝいと（池）・いつくと（伏）

340 ① 0938 もし（良古陽国麦阿尾池御肖伏前高天平〔七平鳳大洋野〕飯三米正）―しも（保穂）・しも（日）

340 ③ 0941 ※□つらなる（良）―まつらなる（古陽国保尾池肖日伏穂前高平〔七平鳳大洋野〕飯三米正）・松らなる

（麦）・松浦なる（阿天大）・桜なる（御）

340 ④ 0942 ※かゝみの（良古陽国保麦阿尾池日伏高天平〔七平鳳大洋野〕飯三米正）・鏡の（肖前）―かみの（御）

340 ④ 0943 かみも (良) — かみを (陽尾池高平飯) ・ 神を (古保麦阿御肖日伏穂前天〔七平鳳大洋野〕 三米正) ・ 神に

(国)

340 ⑤ 0944 ※□けて (良) — かけて (古陽国保麦阿尾池御肖日伏穂前高天平〔七平鳳大洋野〕 飯三米正)

341 ④ 0977 神を^{かけ} (良) — 神も (陽) ・ 神を (古国麦阿尾池御肖日伏穂前高〔七平鳳大洋野〕 飯米正) ・ かみを (保天平

三)

342 ② 1153 ※^いきはなれても (良古陽国保麦阿尾池御肖日伏前高天平〔七平鳳大洋野〕 飯三米正) — こき離も (穂)

342 ③ 1154 ^いゆくかたや (良古麦尾御日高天平〔七平鳳大洋野〕 飯米) ・ ゆく方^やや (穂) ・ 行かたや (三正) ・ 行方
や (陽国) — ゆき^{いく}かふ^ふや (保) ・ ゆき^いかふ^ふや (伏) ・ ゆく^{△&か}かたや (池)

342 ④ 1156 ^いつく (良古麦阿池肖日穂前米正) — ^いつく (陽国保尾御伏高平〔七平鳳大洋野〕 飯三) ・ ^いつく^す (天)

342 ⑤ 1158 ※しらすも (良古陽国保麦阿尾氣御日伏前高天平〔七平鳳大洋野〕 飯三米正) — しらす (穂)

(2) の冷泉家切は保存状態が悪く、いたるところに虫食い跡が認められるが、これらは概ね異同としては扱わず、※を付して掲げておいた。有意の異同の内では、³⁴⁰④ 「かみも」 — 「かみの」、³⁴¹④ 「神^{かけ}を」 — 「神も (陽) ・ 神を (諸本)」 が注目されるが、前者本文と後者の異本注記本文は今のところまったくの独自異文である。

他の異同では³³⁹④ 「いつこと (古本系別本)」 — 「いつくに (定家本) ・ いつくと (非古本系別本・河内本)」 が対立しており、当該切は陽明文庫本・国冬本・保坂本といった古本系別本と一致する (定家本と河内本本文も対立し、河内本は古本系別本と親和性を持つ)。³⁴²④ 「いつく (非古本系別本・定家本)」 — 「いつこ (古本系別本・河内本)」 でも非古本系別本である麦生本・阿里莫本と古本系別本の陽明文庫本・国冬本・保坂本が対立するが、当該切はこゝで

は非古本系伝本・定家本と一致する。当該切「玉鬘」の本文は、その独自異文のありようからは別本とするほかないが、陽明文庫本などの古本系別本とも別系統で、河内本に吸収・利用された本文（これも古本系別本の一系統）とも違った系統の伝本に位置付けられよう。

(3) 〈翻刻本文〉

403 かすならはいとひもせまし／なかつきにいのちをかくる／ほとそはかなき

〈異同一覧〉

403 ① 1426 ※かすならは（良古麦阿東尾陽池御肖善日穂高天平〔鳳岩〕飯三正）・数ならは（米）―かすならぬ^{§ハ}（伏）・

数ならは^{§かならずは}（前↓傍「\$数ならは」・か△ならは（大）

403 ② 1427 〽いとひもせまし^{〓すへきイ}（良古麦国尾陽池御肖善日伏穂前高天平〔鳳大岩〕飯三米正）―いとひしもせし（保

東）・いとひもせまし（阿）

403 ④ 1430 いのちを（良麦保国尾池御肖善日伏穂高平飯三正）・命を（古阿東陽前天〔鳳大岩〕）―いのちに（米）

403 ④ 1431 かくる（良古麦保阿東尾陽池御肖善日伏穂前高平〔鳳大岩〕飯三米正）―かゝる（国）・かへる（天）

403 ⑤ 1433 ※はかなき（良古麦保国阿東尾陽池御肖善日伏穂前高天平〔鳳大岩〕飯三米正）―かなしき^{§\$+はか&なき}（前）

(3)の本文は、系統として対立する異同を持たず、系統判別の材料とはならない。

(4) 〈翻刻本文〉

417 などてかくはいあひかたき／むらさきをこゝろにふかく／おもひそめけん
 418 いかならんいろともしらぬ／むらさきを心してこそ人は／そめけれ
 419 こゝのへにかすみへたてはむ／めのはなたゝかはかりもに／ほひこしとや
 420 かはかりはかせにもつてに／はなのえにたちならふへ／きにほひなくとも
 421 かきたれてのとけきころの／はるさめにふるさと人を／いかにしのふや

〈異同一覧〉

417 ② 3179 ※はいあひかたき (良善池)・はひあひかたき (古保麦阿国尾御肖日伏穂前高天平〔七大鳳兼岩横為〕三米正)・はゐあひかたき (陽飯)

417 ③ 3180 ※むらさきを (良古陽保麦阿国善尾御日伏穂前高天平〔七大鳳兼岩横為〕飯三米)・紫を (正)・紫を^{朱白忠} (肖)―むらさきを^朱 (池)

418 ② 3205 いろとも (良保善尾御日伏高)・色とも (古陽麦阿国池肖穂前天平〔大鳳兼岩横為〕飯三米正)―色にも (七)

419 ② 3370 かすみ (良古陽保阿国善池御日伏穂前高天平〔七大鳳兼岩横為〕飯三米正物風)・霞 (肖)―数み (麦)・かすめ (尾)

419 ③ 3372 3 むめのはな (良保善尾池日高天平久物)・むめのはな (陽御穂)・梅のはな (古国伏〔七大鳳兼岩横為〕飯)・梅の花 (前三米正)・うめのはな (風)―梅花 (阿肖)・桜花 (麦)

419 ⑤ 3376 にほひ (良古陽保麦阿国善尾池御肖日伏穂前高天平飯三米正久物風)・匂ひ (古〔大鳳兼岩横為〕)―にほく (七)

- 420 ① 3405 かはかりは（良古陽保麦阿善尾御肖日穂前高天平〔七大鳳兼岩横為〕飯三米正）・香はかりは（国）――
 かはかりは^{△△}（池）・かはかりを（伏為）
- 420 ② 3406 かせにも（良陽善尾伏高平飯）・風にも（古保麦国池御肖日伏穂前天〔七大鳳兼岩横為〕三米正）――風に
 （阿）
- 420 ② 3407 つてに（良）――つてよ（古陽保麦国尾池御肖日伏穂前高平〔七鳳兼岩横為〕飯三正）・つてよ[≡]（阿）・つ
 けよ（天大米）・つてよ[≡]（善）
- 420 ③ 3408 〽9※はなのえに（良古陽保尾日穂高平〔七大鳳兼岩横為〕）・花のえに（麦阿国善池御肖伏前天飯三米
 正）――花えに（穂）
- 420 ⑤ 3412 ※なくとも（良古陽保麦阿国善尾池御肖日伏穂前高天平〔七大鳳兼岩横為〕飯三米正）――なくとん（保）
- 421 ① 3615 かきたれて（良古陽保麦阿国善尾池御肖日伏穂前高天平〔七大鳳兼岩為〕飯三米正風）――△きくれて（横）
- 421 ② 3617 ころの（良陽保尾池御肖日伏高天平飯三米）・比の（古麦阿国前〔七大鳳兼岩横為〕正風）――程の（穂）・
 ほとの[≡]（善）
- 421 ⑤ 2620 いかに（良古陽保麦阿国善尾池御肖日伏前高天平〔七大鳳兼岩横為〕飯三米正風）――いかゝ（穂）

(4)では、420 ②「つてに」――「つてよ（諸本）・つけよ・つてむ」といった本文が対立するが、当該切の独自異文である「つてに」では文意が安定せず、「よ（与）」を「に（尔）」と読み〓書き誤って生じた異文と理解される（「つけよ」も「て（天）」を「け（介）」と読み〓書き誤ったものである）。そのほかの異同は概ね僅少異同を持つのみであり、当該切の本文は諸本と一致しており、系統判別の材料とはならないので、当該切「真木柱」の本文系統は不明とせざるを得ない。

るを得ない。

(5) 〈翻刻本文〉

433 心ありて風のよくなるはな／のえにとりあへぬまでふき／やよるへき

434 かすみたに月とはなとを／へたてすはねくらのとりも／ほころひなまし

435 はなのかほえならぬ袖に／うつしもてことあやまりと（に）／いもやとかめん

〈異同一覧〉

433 ① 0764 心ありて（良古陽麦阿国三池肖日前高天平〔七大鳳甘岩横桃〕正）・ころありて（保尾甲伏穂飯米）・心有

て（麦）——心あて&リ||リ&て||てに（御）

433 ② 0765 ※風の（良古陽麦阿国尾池御肖日伏前高天平〔七大鳳甘岩横桃〕米正）・かせの（三甲穂飯）——かせも||の

（保）

433 ② 0766 よくなる（良）——よくめる（古保麦阿国三尾池御甲肖日伏穂前高天平〔七大鳳甘岩横桃〕飯米正）・よ§く

める（陽）

433 ③ 0768 えに（良保甲）——木に（古陽麦阿国三池御日穂天平〔七大鳳甘岩横桃〕米）・きに（尾肖前高飯正）・えた

に（伏）

434 ③ 0779 ※へたてすは（良古陽保麦阿国三尾池御甲肖日伏穂前高天平〔七大鳳甘岩横桃〕米正）——へたすは（飯）

434 ④ 0781 ※とりも（良陽保尾池御甲日穂高天飯）・鳥も（古麦阿国三肖伏前平〔大鳳甘岩横桃〕米正）——△△も

（天）・鳥§のも（七）

434 ⑤ 0782 ほころひなまし（良古保阿三尾池御甲肖日伏穂前高天平〔七大鳳甘岩横桃〕飯米正）――ほかころくろひへななまし

（陽）・ほころなまし（麦）・をとろきなまし（国）

435 ① 0806 ※かほ（良甲）・かを（陽保麦阿国三尾池御肖日伏穂前高平飯）・香を（古天〔七大鳳甘岩横桃〕米正）――

えかを（御）

435 ② 0807 えならぬ（良古保麦阿国三尾御甲日伏穂前高天平〔七大鳳甘岩横桃〕飯米正）・え（朱合点）ならぬ（肖）――ならは

ぬ（陽）・なら（+え）ぬ（池）

435 ③ 0809 うつしもて（良古保麦阿国三尾池御甲肖日伏前高天平〔七大鳳甘横桃〕飯米正）――うつしても（陽穂岩）・

うつしもても（\$）（御）

435 ④ 0810 ことあやまり（に）と（良）――ことあやまりと（古保国三尾池御肖日穂前高天平〔大鳳甘岩横桃〕飯米正）・事

あやまりと（陽甲伏）・ことあやまりに（麦阿七）

435 ⑤ 0811 ※いもや（良古陽保麦阿国三尾池御甲肖日伏穂前高天平〔七大鳳甘岩横桃〕飯米正）――妹（||いも）や（平）

(5)では、433 ②「よくなる」――「よくめる（諸本）」が対立し、当該本文は独自異文となる。「なり」も「めり」も

大意は変わらないが、こゝは伝聞推定である「なり」よりも視覚推量である「めり」の方が相応しい場面ではあろう。

433 ③「えに（良保甲）」――「木に（諸本）」の対立は重要であり、当該切は別本中の保坂本・甲南女子大本に一致する。⁽²⁰⁾

435 ④「ことあやまり（に）と」では、異本注記本文が麦生本・阿里莫本・七毫源氏とのみ一致しており、七毫源氏は別とし

て非古本系別本に共通する「ことあやまりに」とある本文のルーツが鎌倉初期頃まで遡れることになる。以上からは、

当該切「梅枝」の本文は保坂本・甲南女子大本に近しい古本系別本の系統と判断される。

以上、僅か七葉の、しかも和歌本文のみの検討であるが、少なくとも「末摘花」「落標」「玉鬘」「梅枝」の本文は、別本と分類される系統の本文を持つ親本から抄出されたものと見做すことができる。ただし、先にも述べたように、抑も定家本・河内本自体が存在しない時代の書写にかゝる本切の系統分類は、それほど意味を持つものではないが、鎌倉初期頃の堂上貴顕のあいだに通行していた本文の様態を知る一端となることは確かであろう。また、詞書や作者注記もなく和歌本文のみで『源氏物語』を享受できる読者を持っていたことが窺われるこうした遺品の存在は、平安末・鎌倉初期における物語の享受者層とそのありようを想像させる点でも貴重なものと考ええる。更なるツレの出現に期待したい。

〈注〉

- (1) 「源氏集」の諸相については、田中登『源氏集』の種々相（森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望』第六輯「三 弥井書店、平成二十一年十月」所収）に詳しい。
- (2) 小松茂美『古筆学大成』第二十三卷「物語 物語注釈一」（講談社、平成四一〇〇二年六月）。
- (3) 「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観』第五卷（角川書店、昭和六十二一〇〇七年四月）421「源氏物語」（今井源衛担当）に依る（以下、「大観」と略記）。
- (4) 池田龜鑑編著『源氏物語大成』第一冊「校異篇」（中央公論社、昭和五十九一〇〇四年十月普及版初版↓以下、第二冊「同十一月刊」・第三冊「同十二月刊」を使用）に依る（以下、「大成」と略記し、漢数字は頁、算用数字は行を示す）。
- (5) 源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第二卷「若紫く花宴」（桜楓社、平成元一〇〇九年六月）、同『源氏物語別本集成続』第二卷「若紫く花宴」（おうふう、平成十七二〇〇五年十一月）に依る（以下、「別本集成」「別本集成続」と略記）。以下、

本稿では「別本集成」第四卷「明石〱絵合」(桜楓社、平成三1991年一月)・第六卷「玉鬘〱篝火」(おうふう、平成五1993年九月)、第七卷「野分〱梅枝」(同六1994年十月)、「別本集成続」第四卷「明石〱絵合」(同十九2007年六月)・第六卷「玉鬘〱篝火」(同二十一2009年七月)、第七卷「野分〱梅枝」(同二十一2010年六月)の各本を使用した。

(6) 冷泉家時雨亭文庫叢書第八十三卷『大鏡 文選 源氏和歌集 拾遺(一)』(朝日新聞社、平成二十2008年十二月)所収の「源氏和歌集上・解題(岩坪健)」参照。

(7) 寺本直彦『源氏物語受容史論考続編』(風間書房、昭和五十九1984年一月)第一部「平安期・鎌倉初期和歌と源氏物語」第四章「平安末期歌壇における源氏物語」第四節「後徳大寺左大臣実定と源氏物語」二「源氏集」に関する実定と俊成との贈答歌」・三「源氏集」について」参照。

(8) 「古筆学大成」図³⁴¹は、現在、早稲田大学図書館に收藏されるが、旧蔵者による丁寧な論考がある(佐佐木忠慧『国文学古筆の考察』[青簡社、平成二十三2011年三月]第七章「源氏物語の古筆切」二九「伝西行筆源氏切 いろ〱に」)。

(9) 本稿で校異に用いた諸本の略号・略称及び校異記号は以下の通り(利用元の資料の略号を改めたものについては、当該資料末尾に「↓」として元の略号を示した。同一資料は「別本集成」「別本集成続」の翻刻を優先して用いたが、同書が用いなかった巻については、他資料を用いたため、重複して掲げたものがある。陽明文庫本の翻刻本文が「別本集成」「別本集成続」で一致しない箇所については、陽明文庫デジタルアーカイブに試験公開される画像に依ったが、一々の注記は省略した。また、同書中、御物本・伏見天皇本については、『御物 各筆源氏』『貴重本刊行会、昭和六十一1986年十二月』『梅枝』及び吉田幸一編『源氏物語 四』『古典文庫第五三九冊、平成三1991年十月』の影印を参照した部分がある)。「別本集成」「別本集成続」が採らなかった河内本諸本については、加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』(風間書房、平成十三2001年二月)に依ったが、同書で本文表記が確定しない箇所は「↓」を付して示した(「大成」に依った横山本・桃園文庫本・伝藤原為家本や明融本「漣標」も同様)。飯島本は池田和臣編・解説『飯島本源氏物語』第二卷(笠間書院、平成二十一2009年一月)、同第三卷(同二月)、同第四卷(同三月)、同第五卷(同五月)所収の影印に依る。米国議会本は国立国語研究所ウェブサイト公開される「米国議

会図書館蔵『源氏物語』翻字本文、三条西家本は「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」に公開される画像、大正大学本は大正大学附属図書館「OHDAーデジタルアーカイブス」に公開される画像に依る（扱う資料の性質上、正徹本等については敢えて省略した）。角屋本（未摘花）は加藤洋介「角屋保存会蔵 源氏物語未摘花巻―解題と影印・翻刻―」（『角屋研究』第18号、平成二十一年2009年二月）所収の影印及び翻刻に依る。明融本（濔標）は、関西大学文学部加藤洋介研究室ウェブサイトに公開される「源氏物語校異集成（稿）」に依った。冷泉家時雨亭文庫蔵『源氏和歌集』は前掲注（6）所収の影印、『物語二百番歌合』は日本古典文学影印叢刊14『物語二百番歌合 風葉和歌集桂切』（貴重本刊行会、昭和五十五1980年八月〔池田利夫解説〕）、所収の影印に依り、『風葉和歌集』は久曾神昇・樋口芳麻呂・藤井隆共編『物語和歌総覧本文編』（風間書房、昭和四十九1974年六月）所収の宮内庁書陵部蔵〔二五・四三〕本翻刻に依った。

《校異略号・略称等》

良 伝後京極良経筆小巻物切源氏集	三 三条西家本（宮内庁書陵部蔵）
米 米国議會本（米国議會図書館蔵）	正 大正大学本（大正大学図書館蔵）
飯 飯島本（書芸文化院春敬記念書道文庫蔵）	角 角屋本（角屋保存会蔵・未摘花）
明 伝明融等筆本（実践女子大学蔵↓濔標）	冷 源氏和歌集（冷泉家時雨亭文庫蔵・未摘花）
物 物語二百番歌合（穂久邇文庫蔵↓真木柱）	風 風葉和歌集（宮内庁書陵部蔵↓玉鬘・真木柱）
（以下、「別本集成」及び「別本集成統」に依る）	
古 大島本（古代学協会蔵）	陽 陽明文庫本（陽明文庫蔵）
御 御物本（東山御文庫蔵・各筆源氏）	阿 阿里莫本（天理図書館蔵）
尾 尾州家河内本（蓬左文庫蔵）	麦 麦生本（天理図書館蔵）
東 東大本（東京大学附属図書館蔵）	保 保坂本（文化庁蔵）
国 国冬本（天理図書館蔵）	善 善本叢書本（天理図書館蔵）

池田本（天理図書館蔵）

肖 肖柏本（天理図書館蔵）

日 日大三条西家本（日本大学蔵）

伏 伏見天皇本（古典文庫）

穂 穂久邇文庫本（穂久邇文庫蔵）

前 前田本（尊経閣文庫蔵）

高 高松宮本（国立歴史民俗博物館蔵）

天 天理河内本（天理図書館蔵）

静 静嘉堂本（静嘉堂文庫蔵）

鶴 鶴見大学本（鶴見大学図書館蔵）

平 平瀬本（文化庁蔵）

三 三条西家本（宮内庁書陵部蔵・梅枝）

甲 甲南女子大本（甲南女子大学蔵・梅枝）

〈以下、「河内本集成」に依る〉

七 七毫源氏（東山御文庫蔵）

平 平瀬本（文化庁蔵、末摘花・明石）

大 大島河内本（中京大学図書館蔵）

鳳 鳳来寺本（愛知県新城市鳳来寺蔵）

岩 岩国吉川家本（吉川史料館蔵）

彦 彦根本（彦根城博物館蔵伝為家本）

甘 甘露寺親長本（天理図書館蔵・梅枝↓天）

洋 東洋大学本（東洋大学図書館蔵↓東）

兼 一条兼良奥書本（天理図書館・書陵部蔵）

野 河野記念館本（河野信一記念文化館蔵・玉鬘）

〈以下、「大成」に依る〉

横 横山本（横山敬次郎氏旧蔵）

為 伝藤原為家本（前田侯爵家蔵・真木柱）

桃 桃園文庫本（桃園文庫蔵・梅枝）

《校異記号》

Ⅱ（傍書）＋（補入・記号あり）±（補入・記号なし）\$（ミセケチ）&（なぞり）△（不明）

- (10) 岡寫偉久子『源氏物語写本の書誌学的研究』（おうふう、平成二十二年五月）第二篇「別本における麦生本系諸本」第一章「阿里莫神社旧蔵源氏物語——『源氏物語大成』不採用二十六卷をめぐる——」参照。

(11) 天理圖書館善本叢書和書之部第十四卷『源氏物語諸本集一』（八木書店、昭和四十八・1973年十一月）「解題（曾澤太吉）」に依る。

(12) 「古本系別本」「非古本系別本」等の呼称については、拙稿「鶴見大学図書館蔵『源氏物語』『花散里』の性格」（『中京大学文学会論叢』第10号、令和六・2024年三月）注（20）参照。

(13) 前掲注（6）。

(14) こうした小巻物を直接手に取って鑑賞していたことを示す遺品や用例は見いだせないが、『国宝源氏物語絵巻』（東屋（一））（徳川美術館蔵）では、中の君が浮舟に絵物語を見せる場面が描かれ、絵冊子を見る浮舟に侍女の右近が物語の冊子本を手に取って読み聞かせている（どちらも六半本というよりはやゝ縦長で、四半本のように描かれているが、それほど大型の冊子とは見えない↓このように絵と文が分離して別冊子としてあったⅡ物語の場面を描いた絵本が別冊として制作されたものが、絵冊子に直接詞書を付して絵巻として独立に鑑賞するものへと発展していったものと想像される）。『紫式部日記絵詞』（蜂須賀家本）第三段には、文机の上に卷子装の「白氏文集」が拵けて置かれていたところが描かれるが、大振りの卷子本などはそのようにして鑑賞されていたことがわかる。『国宝源氏物語絵巻』や『紫式部日記絵詞』は縦二・三cm以内の、卷子本としては思いの外小振りのものなので、これらも手に取って鑑賞されていたのかも知れない（通常の卷子本が縦三〇cmほどなのに対して、絵巻物類は二・五cm内外のものが多く、室町後期には縦一〇〜一五cmの源氏絵が流行していたことも知られる『日本の美術』第119号・秋山光和編「源氏絵」（至文堂、昭和五十一・1976年四月）参照）。この伝良経筆小巻物切源氏集は、和歌すべてを収載すると予想されるので、絵巻と対になって制作されたものではないと考えられるが、その小ささは、文机などに置くよりは、直接手に取って鑑賞されたと考える方が自然でなものである（物語写本に多い六半Ⅱ枳形本という形状も、用紙の節約というよりは、そうした対象者の用途Ⅱ鑑賞方法から選択された形と理解される）。

(15) 近時、京都古書組合発行の目録に「後京極良経」と極められた一葉が掲載されたが、本稿ではこれを検討対象に加えなかった。詳しくは購入者の公表を俟ちたい。

- (16) 伊井春樹・大坂大学古代中世文学研究会編『古筆切集浄照坊蔵』（大阪大学古代中世文学資料研究叢書1、和泉書院、昭和六十三1988年七月）所収。
- (17) 冷泉家時雨亭文庫編冷泉家時雨亭文庫叢書第八十四卷『古筆切 拾遺（2）』（朝日新聞社、平成二十一年2009年二月）古筆切23「源氏集」（田中登解題）。
- (18) 田中登編『平成新修古筆資料集』第五集「一四 後京極良経 小巻物切（源氏集）」（思文閣出版、平成二十二年2010年九月）。
- (19) 別本である可能性のある断簡については、高田信敬「断簡——小さな窓から眺めた『源氏物語』——」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』②9花散里）（国文学「解釈と鑑賞」別冊、至文堂、平成十五年2003年六月）、田中登・横井孝編『源氏物語 古筆の世界』（武蔵野書院、令和五年2023年十一月）224～226「西行（明石）①～③」（横井孝解説）参照。
- (20) 保坂本「梅枝」は「松風」以降の鎌倉期書写三十六帖（「浮舟」を欠く）に属し、「別本集成」正編が陽明文庫本に代えて底本として用いた古本系別本である。甲南女子大本が極めて特異な本文をもつ古本系別本であることは、大内英範「伝為家筆梅枝巻とその本文」（古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考』第14集「新典社、平成十七年2005年五月」所収）、米田明美解題・翻刻『甲南女子大学蔵 源氏物語鎌倉古写本 梅枝・紅葉賀』（勉強出版、平成二十二年2010年三月）「解題」に詳しい。